

## 舞台『蟻地獄』オフィシャルレポート

6月4日、東京・よみうり大手町ホールにて舞台『蟻地獄』が開幕しました。

2020年7月に予定されていた公演が新型コロナウイルス感染症拡大の影響で中止になり、今回は満を持しての“復活公演”となります。キャスト・スタッフはもちろん、観客の皆様もこの日をきっと心待ちにされていたことと思います。

無事に開幕した今作の、初日に先立ち行われたゲネプロの様子をお伝えします。

孝次郎（高橋祐理）と修平（近藤廉）が、杉田（迫英雄）という情報屋に教えられた裏カジノに乗り込むところから物語は始まります。イカサマをして大金を手に入れようと浮足立つ孝次郎と修平ですが、実はこれが杉田の罠で、2人はイカサマを見破られてしまい、修平は裏カジノのオーナー・カシワギ（山口大地）によって人質にとられてしまいます。



孝次郎は修平を救うために、カシワギから出された条件「5日間で300万円を用意する」をクリアしようと、ひたすらにさがし続けます。次から次へと訪れる試練を乗り越えて、孝次郎はタイムリミットまでに無事に修平を救うことができるのでしょうか……？

板倉俊之による原作小説「蟻地獄」は、2015年に武村勇治氏の作画により漫画化されていて、既に小説や漫画を読んで内容を知っている人は、今作のことを知ったとき「あの話をどうやって舞台にするの？」と驚いたのではないのでしょうか。「蟻地獄」は終始主人公の視点で物語が進み、その“制約”を最大限に利用したミステリーなので、観客という第三者の視点が入る舞台作品にすることは、普通は不可能だと思えます。しかしそこは、原作者である板倉による脚本・演出だけあって、決して原作の世界観を壊すことなく、新たな舞台版『蟻地獄』として見事に創り上げられています。

高橋はほぼ出ずっぱりで、主人公の孝次郎そのままに上演時間約2時間15分という“タイムリミット”までひたすらに舞台上を駆け回ります。孝次郎は切れる頭脳を武器に、どん底に突き落とされては這い上がりを繰り返しますが、時折見せる19歳のまだ大人になり切れていない少年の表情が、キャラクターの魅力をより深めています。



特に自宅のシーンでは、父（中野裕斗）と母（三木美加子）から感じられる温かな家庭の空気と、両親のことを大切に思う孝次郎の姿に心とまされます。

カシワギ役の山口からは、キレると何をするかわからない激情と冷徹さを持ったヒーロー役として鬼気迫る威圧感が伝わって来ますし、孝次郎たちを罠にはめた杉田を演じる迫が見せる得体の知れない怪しさは、物語の不穏な空気をさらに盛り上げます。



300万円を用意するために、1個40万円で購入されるという人間の眼球を求めて、ついに自殺志願者たちに紛れ込んで集団自殺が行われる廃墟へとたどり着いた孝次郎。そこで宮内（天野浩成）、マフユ（向井葉月）、ケイタ（古賀瑠）、フジシロ（向清太朗）と出会います。それぞれに個性の色が濃いキャラクターでありながら、心の内が見えないミステリアスなところもあり、物語の展開がますます読めずに緊張感は高まるばかり。役にぴったりとはまっている俳優同士の演技バトルにも注目です。



今回の舞台版は、特にキャラクタービジュアルにおいて漫画版を踏襲しているところが多く見られます。漫画版を読んだ方は「あのキャラクターが動いてしゃべっている！」という楽しみ方もできるのではないのでしょうか。



もちろん、小説も漫画版も読んでいないという方にも楽しめるように丁寧に作られた舞台になっています。上演時間が約2時間15分ということで、泣く泣く削られたエピソードも数々ありますが、舞台版として凝縮された“ノンストップ・サバイバル・サスペンス”です。今作を鑑賞後に小説や漫画版を読んでもみれば、舞台では描かれなかった部分を知ることができて何倍にも楽しめるはずです。

映像や照明、音響などスタッフワークも駆使して、スピード感を保ちつつ物語を丁寧に紡ぐ板倉演出は、観客に飽きる暇を与えません。後半に謎が解かれていくと、最初から一つ一つ積み上げてきたすべてのシーンに意味があることがわかり、計算しつくされた物語の緻密さに驚かされます。後半の怒涛の展開は、見終えた後に爽快感を覚えるくらいテンポが良く痛快です。孝次郎がどのような結末を迎えるのか、ぜひ劇場でお確かめください。

文＝久田絢子